

# 日本古代における 三彩・緑釉陶の歴史的特質

Historical Characteristics of Three-Colored and  
Green-Glazed Ceramics in Ancient Japan

高橋照彦

①日本における三彩・緑釉陶生産の史的位相

②日本における三彩・緑釉陶の成立過程

## 【論文要旨】

本稿は、日本古代の鉛釉陶器を題材に、造形の背後に潜む諸側面について歴史的な位置づけを行った。まず、意匠については、奈良三彩が三彩釉という表層のみの中国化であるのに対して、平安緑釉陶では形態や文様も含めて全面的に中国指向に傾斜したといえる。また、日本における焼物生産史全体でみると、模倣対象としての朝鮮半島指向から中国指向への大きな比重の移動は、この奈良三彩や平安緑釉陶が生産された8世紀から9世紀に求められるとした。

次に、用途・機能については、奈良三彩が祭祀具あるいは仏具など宗教祭器としての性格を持つものに対して、平安緑釉陶は宗教的機能が続くものの、基本的に実用食器としての用途が中軸となる点に大きな変質を認めることができる。その変容の契機は、弘仁期における宮廷儀礼の整備の中で、鉛釉陶器が国家的饗宴を彩る舞台装置として組み込まれたことが考えられる。

生産体制については、奈良三彩が中央官営工房生産とみられるのに対して、平安緑釉陶では各地の在地生産を基盤にしつつ、中央からの品質規定のもと国衛が生産に関与する体制であったと判断できる。それは、中央から地方への技術委譲であり、窯業生産技術において奈良時代まで続いてきた畿内優越状況が終焉を迎え、畿外卓越化へと向かう転換点になったものといえる。

最後に、技術導入過程については、白鳳期の緑釉技術が朝鮮半島系であり、特にその故地として百済が最も妥当と推測した。そして、百済滅亡前後の混乱の中で日本への亡命者が伝えた可能性を挙げた。続く奈良三彩は、前代からの鉛ガラス・鉛釉の技術を持っていた工人（玉生）が遣唐使として派遣されて、唐三彩の部分的技術を移入したものと想定した。奈良三彩は、日本在来の素地成形技術の上に、朝鮮半島系の施釉基礎技術と中国系の三彩技術が重なって成立したものといえる。